

Kazuo Ishiguro が描く現代の〈悪〉

The Remains of the Day における〈凡庸さ〉の帰結

向井 秀忠

はじめに

Kazuo Ishiguro の *The Remains of the Day* (1989) が大きな意義を持つのは、イギリス文化の本質や価値観を体現する作品となり得たこと、時代のパラダイムが大きく転換する中で主人公 Stevens をはじめとする登場人物の信念が大いに動揺する有り様を巧みに描いているからだけではない。この作品の本質的なテーマのひとつに、Stevens のような普通の人間こそが大きな社会的な〈悪〉となり得るという有り様を示していることにあり、本発表において、Stevens の語りや振る舞いを通して、Ishiguro が描こうとした現代における〈悪〉の本質について考察することを試みた。

執事としての「誇り」と二つの出来事

Stevens は、並々ならぬ誇りを持ってこなしてきた執事の仕事について、“balance between attentiveness and the illusion of absence that is essential to good waiting”(Ishiguro, 72)が重要と説明している。すぐれた給仕に“attentiveness”が必要不可欠とするのはよくわかるが、ここで注目したいのは、もうひとつの“the illusion of absence”という要素である。この点に、彼自身の生き方そのものが凝縮され、その生き方の問題の根源があるように思われるからだ。次のような二つの場面に直面したとき、彼の問題が顕在化してくる。

ひとつめは、心情的にすっかり親ドイツ派となっていた主人の Lord Darlington の命令によって、来客の安全性が保証できないという理由から、二人のユダヤ人のメイドを解雇したことである。メイドを統括する責任者である Miss Kenton は、ユダヤ人であるという理由だけで長く十分に勤めてきた二人を解雇などできないと反対し、これは人種差別的な“a sin”(Ishiguro 149)であると強く批判する。これに対して Stevens は、‘His lordship has made his decision and there is nothing for you and I to debate over.’(Ishiguro 148)と言い放ち、‘If his lordship wishes these particular contracts to be discontinued, then there is little more to be said.’(Ishiguro 149)と Miss Kenton の反対をにべもなく一蹴し、こんな職場でこれ以上は働けないと言う彼女に対し、このような複雑な問題については主人のような立場の人たちの判断に従うべきだと諭している。この場面においては重要なのは、結果的に Stevens が人種差別的な判断に基づいた行動を実行してしまったことではなく、彼自身が“my every instinct opposed the idea of their dismissal.”(Ishiguro 148)と回顧しているように、職務を果たすため、自分の意に背きながらもただひたすら主人の命令に従っていることである。自分の言動の是非についてそれ以上は考えることをやめてしまうという思考停止状態に自らを陥っていることがわかる。主人の命令に対して執事があからさまに面と向かって意見することが難しいことは理解できるが、もし彼が自分の判断にこそ忠実に行動していれば、何かの方法でこの不当な解雇を妨げたかもしれないし、それができないにしても、この理不尽な仕打ちに対する怒りと悲しみを Miss Kenton と多少とも分かち合うことができていたはずである。後になって、Miss Kenton はこの時の彼の態度について‘Why, Mr Stevens, why, why, why do you always have to pretend?’(Ishiguro 154)と強く批判する

が、この“pretend”という批判こそ、彼の問題の本質を言い当てているように思われる。

ふたつめは、1935年頃、三人の客人が Darlington Hall を訪れ、政治に関する重要な議論をしている中、給仕を務めていた Stevens は、客人のひとりからイギリスの外交政策の策定に関係する意見を求められた。これらの質問に自分が当惑することを期待されていると察した Stevens は、ひたすら‘I’m very sorry, sir, but I am unable to be of assistance on this matter.’ (Ishiguro 195) と繰り返し、最後まで自分の考えを明確には表明しなかった。これはイギリスの庶民の政治的判断能力の有無を試すための質問であり、Stevens は質問者の期待通りに振る舞えたものの、図らずも庶民にその能力がないことを証明する具体例となってしまう。ここでも彼は、自分の頭で考え、自分で判断することはできないように振る舞い、主人たちの階級の判断に無批判に従うことこそが自分たちの義務とする姿勢を見せることとなった。Stevens 本人は、執事としての義務を果たしたものと考えているだろうが、実際のところは、自分が盲信している理想的な執事の職務を果たすため、長い間に渡り、ひたすら主人の命令に忠実に従うことだけに専心してきたことで、自分の職務や身の回りを越えた事柄について考えることをやめてしまい、自分で判断することをすっかり放棄した思考停止の状態に陥っていたのではないか。

Stevens と Eichmann、そして〈陳腐な悪〉

これらの Stevens の態度は、Hannah Arendt が Eichmann 裁判の報告書の中で指摘した「陳腐な悪（‘the banality of evil’）」と非常に近いものである。Arendt は、ナチス親衛隊の中佐として強制収容所・絶滅収容所への移送・管理を実務的に取り仕切り、ホロコーストという人類史上稀に見る大きな〈悪〉に関わった Adolph Eichmann が極悪を絵に描いたような怪物ではなく、実は、普通で、平凡で、凡庸で、延いては陳腐な人間であったことに驚き、全体主義的な抑圧の下で思考停止となり、躊躇なくすべての判断を権力者に委ねてしまうことが現代社会における〈悪〉の本質のひとつであると指摘している。世界中の非難を受けるに値する残虐で非道を行った Eichmann であったが、それを遂行する強い動機や意図、並々ならぬ強い決心が彼自身にあった訳ではなく、ただ自らの出世欲に突き動かされていただけであったという。そこには決定的な「想像力の欠如」が見出されると言うが、それこそが Eichmann だけではなく、彼と同じような多くの普通の人びとが抱えている〈陳腐な悪〉であると Arendt は考える。「想像力の欠如」によって思考停止の状態に陥ってしまっている点において、執事職の義務を忠実に果たすことによって世間に認められることを強く願ってきた Stevens と、強い出世欲から「ユダヤ人問題の最終的解決」に中心的に関わることになった Eichmann とに本質的な重なりが見出せる。

本発表で論じた〈陳腐な悪〉の問題は、この作品に先行する *A Pale View of Hills* (1982) や *An Artist of the Floating World* (1986) においても、Ogata-san や Ono Masuji らの登場人物を通して描かれている。それは、時代のパラダイムが大きく展開した時代における戸惑い翻弄される姿だけではなく、彼らが示している、時代や大勢に迎合する無批判性、つまり普通の人々の思考停止が大きな〈悪〉を引き起こしてしまうことである。Arendt が指摘したそのような〈陳腐な悪〉の問題は、〈記憶と記録〉とともに、Ishiguro が追求してきた大きなテーマであることがわかる。

※作品からの引用は、Ishiguro, Kazuo. *The Remains of the Day* (London: Faber and Faber, 1989) による。